

〔学術データベース企画報告〕 映画『私はシベリヤの捕虜だった』上映会

高柳, 俊男

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

26

(発行年 / Year)

2014-04

[学術データベース企画報告]

映画『私はシベリヤの捕虜だった』上映会

高柳 俊男

今年、米国立公文書館にて映画『私はシベリヤの捕虜だった』（1952年）が偶然発見された。この映画はCIAの資金提供を受けた田口修治が制作、反共映画として当時話題となった。この映画を実際に鑑賞し、制作者のご子息である田口寧氏と映画を発見した山内隆治氏のお話を聴くなかで、シベリア抑留や映像で記録を残す意義などについてともに考える機会とした。

映画はドキュメンタリーではなく劇映画で、シベリアに多少似た景色が広がる北海道にセットを作って撮影された。寒さと飢えと厳しい労働で少なからぬ死者が出る、帰国（ダモイ）かと思って喜んだのも束の間、より奥地の収容所に送られてさらに過酷な労働に従事させられる——65年以上前のシベリア抑留の実態をかいま見せてくれる内容である。

見ていて不思議なのは、シベリア抑留を実行し抑留兵士を使役したロシア人はほとんどまったく出てこないし、ロシア語も聞こえて来ない。過酷な命令を発するのは当初は戦前そのままの上下関係が残る部隊の上官であり、途中からは「民主化運動」に同調する積極分子（アクチブ）たちである。ロシア人と日本人との対立が主題ではなく、日本人の中にある人間同士の矛盾や葛藤を描き、人間としての筋を通した主人公の生き方に賛辞を贈ろうとしたのではないか？ もちろん、「民主化運動」同調者たちの描き方に対しては、異論もありうると思われる。

シベリア抑留をテーマに研究を続ける小林昭菜さん（本学部卒業生、

現在本学大学院博士課程在籍中)に全面的な協力を依頼し、映画の背景について専門的な解説をしてもらったのが大いに役立った。

参加者は10数人と少なく、本学部学生・教員の参加はなかったが、本学部卒業生や他学部生などが足を運んでくれた。終了後に学部長室で開いた簡単な茶話会も含めて、参加者がそれぞれ感想を述べあい、歴史と現在を考えるいい交流の場となった。

なお、映画『私はシベリヤの捕虜だった』はDVDが発売されており、その後学部資料室で購入していただいた。

-
- 日 時：2013年11月23日(土) 14:00～17:00
 - 場 所：法政大学58年館6階 868A教室
 - 内 容：映画『私はシベリヤの捕虜だった』(1952年)上映
田口寧氏と山内隆治氏の講演と、小林昭菜さんの背景解説
-